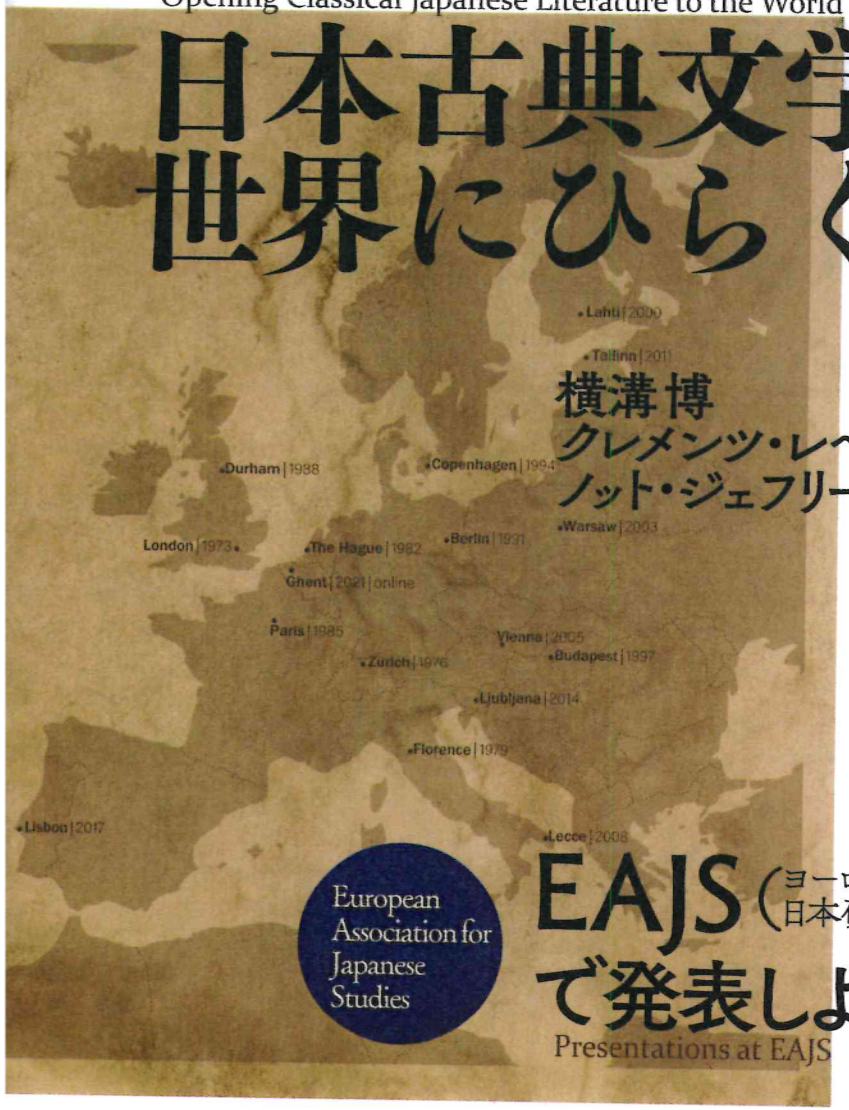
Opening Classical Japanese Literature to the World

日本古典文学を世界にひらく



横溝博
クレメンツ・レベッカ
ノット・ジェフリー
〈編〉

European Association for Japanese Studies

EAJS（ヨーロッパ日本研究協会）で発表しよう

Presentations at EAJS

勉誠出版

European Association for Japanese Studies

日本古典文学を世界にひらく

EAJS（ヨーロッパ日本研究協会）で発表しよう

横溝博
クレメンツ・レベッカ
ノット・ジェフリー
〈編〉

勉誠出版

9784585390145

1921090045001

ISBN978-4-585-39014-5
C1090 ¥4500E

定価［本体4,500円+税］
勉誠出版

ヨーロッパにおける日本学は長い伝統を有しており、
ハイレベルかつバラエティに富んだ視角は、世界規模での学的影響を与え続けている。
そのヨーロッパ日本学の最先端を伝える研究集会が、
1973年設立されたEAJS（ヨーロッパ日本研究協会）による国際会議である。
本書では2021年に開催された同集会における
日本古典文学を考えるための新視点を提示する充実のパネル4点を収載。
日本古典文学を世界にひらいていく研究視角、方法論のパイロットケースを提示、
EAJSの歩みや参加のためのhow toも示し、
これからの日本研究・日本学の未来を構築するための手引きとなる貴重な一書。

目次

はしがき［編者］――(6)

ＥＡＪＳ大会の開催都市一覧（1973～2021）――(17)

第一部 『源氏物語』のパトロン・藤原道長と紫式部の〈戦略〉
The *Tale of Genji*, its Author, and her Patron: The "Strategies" of Murasaki Shikibu and Fujiwara no Michinaga

テーマコンセプト［横溝博］――2

『源氏物語』の勝利――「絵合」巻における主家賛美の方法と紫式部［横溝博］――6
Hiroshi YOKOMIZO, The *Tale of Genji*, Victorious: Murasaki Shikibu and Techniques of Household Encomium in the "Picture Contest" Chapter

「源氏」の物語という〈企て〉――藤原道長と紫式部と「作り手」の人々［中西智子］――28
Satoko NAKANISHI, The "Genji" Story as Group Project: Fujiwara no Michinaga, Murasaki Shikibu, and Other "Authors"

藤原道長の影の元で――『紫式部日記』における摂関政治の方法と中宮サロンの営みの意義［ネグリ・カロリーナ］――49
Carolina NEGRI, In the Shadow of Fujiwara no Michinaga: Political Strategies and the Role of the Empress' Salon in *Murasaki Shikibu nikki*

第二部 〈平安文学〉の歴史的構成――再発掘される「既成事実」
The Historical Structure of "Heian Literature": Excavation of a *Fait accompli*

テーマコンセプト［ノット・ジェフリー］――70

『枕草子』本文の受容と変容――諸本間の本文異同と「女」「女房」「乳母」をめぐる記述の差異から［山中悠希］――73
Yuki YAMANAKA, Gallery of Variants: Dueling Portraits of the Feminine in *Pillow Book* Manuscript Lines

中世源氏学の心理的転換――宗祇流の性格を求めて［ノット・ジェフリー］――97
Jeffrey KNOTT, A Question of Character: The Sōgi School and the Psychological Turn in Medieval *Genji* Studies

「つくりものがたり」の位相［小川陽子］――130
Yōko OGAWA, *Tsukuri-monogatari*: An Archaeology of Premodern Literary Analysis

第三部 写本研究の未来――マテリアリティー、テキストマイニング、データ基盤の構築
The Future of Manuscript Studies: Materiality, Text-mining, and Building Data Infrastructure

テーマコンセプト［海野圭介］――156

書誌学的本文研究の未来――「定家手沢本源氏物語」を事例として［佐々木孝浩］――160
Takahiro SASAKI, The Future of Bibliographical Textual Criticism: The Case of "Teika's Personal Copy of *Genji monogatari*"

変体仮名を用いて写本の書写者と書写年代に迫る——その方法と事例［齊藤鉄也］——177
Tetsuya SAITŌ, Using *hentaigana* to Investigate Manuscript Copyists and Copy-dates: Methods and Case Studies

大規模画像蓄積からデータ駆動型の研究へ
——EAJS 2021における特別企画The future possibilities of DH in Japanese Studiesの報告から［海野圭介］——204
Keisuke UNNO, From Large-Scale Image-data Accumulation to Data-Driven Research: Report on the EAJS 2021 Special Panel "The Future Possibilities of DH in Japanese Studies"

第四部 文化資本の所有者——近世の武士社会における教養人の交換と使用について
Carriers of Cultural Capital: The Exchange and Use of Cultured Individuals in Warrior Society in the Early Modern Period

テーマコンセプト［クレメンツ・レベッカ］——218

豊臣秀吉と『源氏物語』［新美哲彦］——221
Akiiuko NIIMI, Cultural Commerce between Toyotomi Hideyoshi and Kaoku Gyokuei

柳沢吉保の文化資本としての女性たち［ローリー・ゲイ／新美哲彦 訳］——238
Gaye ROWLEY, Yanagisawa Yoshiyasu's Human Capital: The Women

異言語を話す——日本の大名や禅僧における唐話の意味、一六六一～一七一一［クレメンツ・レベッカ／新美哲彦 訳］——253
Rebekah CLEMENTS, Speaking in Tongues? Daimyo, Zen Monks, and Spoken Chinese in Japan, 1661–1711

《特別寄稿》
EAJS（ヨーロッパ日本研究協会）の過去と現在
——過去三十年間の大会を振り返りながら［ワトソン・マイケル／緑川眞知子］——289
Michael WATSON / Machiko MIDORIKAWA, The European Association for Japanese Studies, Past and Present: Reflections on the Past 30 Years of EAJS International Conferences

あとがき［横溝博］——313

執筆者紹介——315

【参考資料】EAJS 2021 Abstracts——左1

Carolina NEGRI
カロリーナ・ネグリ

藤原道長の影の元で

――『紫式部日記』における摂関政治の方法と中宮サロンの営みの意義

一　『紫式部日記』の構成と冒頭部の機能

平安時代は仮名文字の発達にともなって女性の手による日記・物語・随筆といった散文、そして女性歌人による和歌などの文学活動が花開き、優れた作品が残された時代であった。その多くの作品は、摂関政治と深い繋がりを持ち、作品の作者であり、享受者でもある女房たちが貴族社会でどのような役割を担っていたかを知らせてくれるものであろう。本稿では、摂関期に執筆された『紫式部日記』を取り上げ、記録することへの強い志向を暗示している内容を分析しながら、紫式部の手によって描かれた藤原道長の政治的意図、そして摂関期における中宮サロンの営みの意義を考察していきたい。

一〇一〇年ごろ成立した『紫式部日記』は次の四つの部分から構成されている。（1）寛弘五年（一〇〇八）秋七月頃から翌六年（一〇〇九）正月までの記事で、道長の娘である中宮彰子の皇子出産（一条天皇の第二皇子敦成親王）、その誕生にかかわる行事・儀式などを記述している。（2）いわゆる「消息部分」。正月の行事に奉仕した女房たちを観察し、外見から態度振る舞いまでを批評している。（3）年時不明の三つほどの断簡的記事で、一

つは道長の自宅土御門殿の供養堂での仏時のこと、あと二つは道長の歌の贈答のことが記されている。(4) 寛弘七年（一〇一〇）正月の記事で、敦成・敦良両親王の戴き餅のことを中心とした行事記録である。[1]『紫式部日記』の執筆の目的は明らかではないが、敦成親王誕生に関する記述が日記全体の五分の三に及ぶことを見ても、やはりこれが日記を残すことの主眼であったと考えられよう。しかし、多くの研究者が指摘するようにこのような公的行事の記録を、中宮つきの一女房が自発的に執筆するということは考えられないことである。この敦成親王の誕生は、道長の政治的基盤を固め、一族の栄華を約束するものであった。この皇子誕生の記録を仮名日記の形で残そうとしたのはおそらくは道長その人であり、文才で知られる紫式部が抜擢されたのであろう。皇子誕生の記録は道長の『御堂関白記』、実資の『小右記』、行成の『権記』などにも見られる。したがって、道長がわざわざ中宮付きの紫式部に命じて仮名文による記録を残そうとしたことには特別の理由があったと考えられる。長女彰子の皇子出産は道長一族にとって願ってもない慶事である。その記録を仮名日記として残すことは、広く後宮社会に一家の栄華を知らしめることになる。道長はいずれは入内させねばならない娘たち、その女房たちのためにも、後宮社会で広く読まれていた「日記」の形でこの一家の佳例を記録しておきたかったのであろう。また、『枕草子』との関連も見逃せない。兄道隆の盛時に中宮大夫として中宮定子に奉仕した道長は、中関白家の隆盛のさまを見、中宮サロンの華麗さも実感していた。道長がこのような環境を自分の娘にも望んだであろうことは想像に難くない。定子中宮の盛時を賛美し、後宮社会でもてはやされた『枕草子』への対抗意識が、『紫式部日記』成立の陰にはあったのではないかと考えられる。[2]

紫式部が中宮彰子の女房として出仕したのは、寛弘元（一〇〇四）年十二月、『紫式部日記』の冒頭の記事は寛弘五年（一〇〇八）年七月のことであるから、出仕後約四年が経過している。この時紫式部はおそらく三十六歳、

中宮彰子は二十一歳、道長は左大臣で、四十三歳。道長の要請により、敦成親王の誕生記録の執筆を了承した紫式部は堂々たる名文で『紫式部日記』を書き始めることになる。日記の冒頭部分には土御門殿の栄耀栄華のさまが描かれているが、建築そのものの荘厳ではなく、なによりも庭の叙述から始めていることが、物語作者の営為として注目される。

秋のけはひ入りたつままに、土御門殿のありさま、いはむかたなくをかし。池のわたりの梢ども、遣水のほとりの草むら、おのがじし色づきわたりつつ、大方の空も艶なるにもてはやされて、不断の御読経の声々、あはれまさりけり。[3]

季節は秋であるのに、土御門殿の庭はこの季節に人生の虚しさを感じさせる枯れた植物の寂しい様子を暗示してはいない。むしろ池の岸辺の木々の梢や、遣水の汀の草むらなど、とりどり一面に色づいていることによって、生き生きとした彩り豊かな様子が伝わってくるようである。その色とりどりの庭が敦成親王の誕生に関わる限りない慶びの比喩表現として機能している。庭を眺めながら、日暮れて遠くから聞こえてくる不断経を読む僧たちの堂々たる声も特別な役割を帯びるようだ。それは親王の誕生が近づいていることを知らせるのだが、同時に不安に包まれる道長の家の人々の心も語っているのである。

二　人物描写の方法――道長が登場する場面

『紫式部日記』には紫式部の仕える中宮彰子と道長家の人々、それを取り巻く宮廷貴族の姿が見事に写しとられている。なかでも注目されるのは、当代最高の権力者である道長の中宮の父としての描かれ方であろう。誰よりも親王の誕生を期待している道長は主家を代表する人物として冒頭部近くで舞台に登場する。

渡殿の戸口の局に見出せば、ほのうち霧りたる朝の露もまだ落ちぬに、殿歩かせたまひて、御随身召して、遣水払はせたまふ。橋の南なる女郎花のいみじう盛りなるを、一枝折らせたまひて、几帳の上よりさし覗かせたまへる御さまの、いと恥づかしげなるに、わが朝顔の思ひ知らるれば、「これ、遅くてはわろからむ」とのたまはするにことつけて、硯のもとに寄りぬ。

早朝、女郎花を持って紫式部の局を訪れた道長は歌を詠むよう要請する。式部が自分の寝起き顔を恥じらいつつ歌を詠み、道長も返歌をしていった場面である。ここでの道長の行動は貴人然としており、物語にもよく登場する理想的な主人公を思い出させる。『日記』の冒頭部は主家の代表的人物を紹介する点描であると考えれば、この道長の姿は主家の中心たるにふさわしいものといえるだろう。福家俊幸も指摘するように[4]この有名な場面では作者の視線は道長の服装をとらえておらず、「几帳の上よりさし覗ぞかせたまへる御さまの、いと恥づかしげなるに」などという表現にとらえられた道長の姿の実際は意外に曖昧にされている。しかし、このような「恥づかし」とは、その表現者が恥ずかしくなるほど相手が立派であるという古語独特の言葉で、ここでは相手の容姿、人格など総合的なものの威力を認めるものであろう。

主家を代表する道長は『日記』に何度も登場するが、原田敦子が述べるように作者の道長描写、もしくは道長への言及の視角は、大別して三種類に分けられる。[5]

A　中宮御産や祝儀の場における道長の役割や言動について言及するもの
B　道長の私人、家庭人としての側面を描くもの
C　道長と紫式部の交渉を描くもの

Aに属する場面は、中宮の父として、また若宮の外祖父としての道長の中宮御産や祝儀の場における役割や言動を述べるものである。日記の第一部・第二部に記録されている御産前の準備、安産祈願、御産後の給禄、御湯殿儀、五日産養、帝の土御門邸行幸、若宮御戴餅の儀、中宮御堂詣など枢要の場面には必ず道長を登場させていることからすれば、紫式部は細心の注意をもって意識的にこれらの叙述をなしたと思われる。道長に対するそれなりの配慮や、記録者としての冷静な眼のなせるわざであろうが、そこには権力者道長の威風堂々たる姿が描かれることはない。たとえば、御産前に安産祈願が行われる場面での次の描写が印象的である。

殿のうち添へて、仏念じきこえたまふほどの頼もしく、さりともとは思ひながら、いみじう悲しきに、みな人涙をえおし入れず、

神に対しては不安を抱く弱い人間として登場する道長が、土御門邸に集まった女房たちと修験僧と自然に一緒になって、一心に仏の加護をお祈りしているのである。紫式部が見たこの人間的な祖父道長の像には、誰しも共感を寄せるものであって、その人物に賛美を注ぐ一つの根拠にもなると言えるであろう。

Bに属する場面は、一私人として家族の中にある道長の姿を叙述するものである。例としては初孫をいつくしむ道長の姿が挙げられよう。

殿の、夜中にも暁にも参りたまひつつ、御乳母の懐をひきさがさせたまふに、うちとけて寝たるときなどは、何心もなくおぼほれておどろくも、いといとほしく見ゆ。心もとなき御ほどを、わが心をやりてささげうつくしみたまふも、ことわりにめでたし。

人々がまだ寝ている時を気にせずにやってきて若宮を抱き上げたり、あるときは宮の尿をかけられて濡れた着物をうれしそうにあぶっている祖父としての人間味あふれる姿に、紫式部も「ことわりにめでたし」と共感を寄せざるをえない。

Cに属する場面は、道長と紫式部の交渉を描くものである。日記全体に九箇所ほど数えられるが、その中には前述の女郎花をめぐる贈答歌の場面とそして紫式部局から物語の草稿を持ち出す道長を叙述する有名な場面がある。

局に物語の本ども取りにやりて隠しおきたるを、御前にあるほどに、やをらおはしまいて、あさらせたまひて、みな内侍の督の殿にたてまつりたまひてけり。

『日記』には、道長は三十七回を数えるほど登場している。主家を代表するにふさわしい位置が『日記』の中でも与えられていると言ってよいだろう。その登場場面はいずれも印象的なものであり、作者個人にとっての道長の存在の重みも感じられる。

三　中宮彰子への賛美

彰子は、道長の長女で、母は源雅信の娘倫子。長保元年（九九九）一条天皇の女御となり、翌年立后。寛弘五年（一〇〇八）敦成親王を出産、翌年、さらに敦良親王を産み、二代の国母となった。『日記』の冒頭部に初めて登場する場面では誰とも比べられないほど理想的な中宮として描かれている。

御前にも、近うさぶらふ人々とはかなき物語するをきこしめしつつ、悩ましうおはしますべかめるを、さりげなくもて隠させたまへる御ありさまなどの、いとさらなる事なれど、憂き世の慰めには、かかる御前をこそ、尋ね参るべかりけれと、現し心をばひき違へ、たとしへなくよろづ忘らるるも、かつはあやし。

「出産間近の身体で大義であろうけれども、そのようなそぶりもおみせにならないのは、さすがである」と書く紫式部はふと出仕当時の自分自身のことを思い出して、気の進まない宮仕であったが、この中宮の御前にお仕えしたからこそ世の憂きことも忘れられたことを振り返ってみると不思議だと告白しているのである。『日記』の第一部には、詳しく中宮彰子の皇子出産、産養や御幸といった行事が記録されているが、その記録の中にご誕

生の七日の夜に若くて美しい国母として叙述される中宮彰子の様子は印象的である。

御帳の内をのぞきまゐらせたれば、かく国の親ともさわがれたまひ、うるはしき御気色にも見えさせたまはず、すこしうちなやみ、面やせて大殿籠れる御ありさま、常よりもあえかに若くうつくしげなり。

ここで注目されるのは彰子中宮の姿であろう。国母というような、いかめしいものではなく、むしろあえかでつつましい印象を与えるのである。このような叙述については、型通りの賛辞に過ぎず、中宮を全面的に賞美するのにためらいがあるという見方もあると思われる。(6)

皇子出産は主家の慶事を中核に据えていることは動かない事実であるが、彰子中宮は将来の天皇の母の役割だけを果たしているのではないといえるのだろう。広く知られているように、彰子のもとには名だたる女房が出仕し、一大サロンをつくり上げていた。そのサロンにおいては、文化的な営みを才気ある女房が主導し、女主人はそれら女房の行動を追認する立場にあったに違いない。寛弘五年（一〇〇八）に敦成親王が誕生した際の行事において女房が事務的な役割を果たしていたことが知られるが、サロン活動として内裏還啓が近づいていた十一月に行われた御冊子作りが、皇子の出産行事への参加に劣らない、女房の大事な仕事として描かれているのは見逃せないことであろう。

入らせたまふべきことも近うなりぬれど、人々はうちつぎつつ心のどかならぬに、御前には御冊子作りいとなませたまふとて、明けたてば、まづ向かひ候ひて色々の紙選り調へて、物語の本ども添へつつ、所々に文

書き配る。かつは綴じ集めしたたむるを役にて明かし暮らす。

道長は物語に注目していたが、ここでは紙や筆を提供する後見の立場に留まり、彰子主導で紫式部を中心とした女房集団が編集作業を行なったものとみられる。内裏還啓に際しての御冊子作りであるから、半ば公的な意味があったはずである。通説ではここで作られた御冊が『源氏物語』であると考えられており、壮麗な冊子に仕立てることは、彰子が自ずからのサロン活動の成果として『源氏物語』を捉えていたことの現れとみられるのである。(7)『日記』の中で『源氏物語』に何度も触れているのも、このような主家の記録の中に、主家に厚遇されている自作の物語の姿を記しとどめようという情動に支えられてのことであろう。一方、和歌活動に注目すると、一条の朝では歌合の開催自体が少ないことがあり、彰子サロンにおいても、活動として挙げられるのは、『日記』のさまざまな場面で叙述されている日常詠歌をはじめとする風流な営みであることが指摘されている。しかし、道長、倫子と、彰子の女房たちとの間の和歌のやりとりからは、道長と倫子が彰子のサロンを背後で支えていたことがうかがえる。摂関期には、男性官人の間でも評判になるような魅力的なサロンを運営することは、サロンの女主人の存在感を強めることにつながっていたので、当時のサロンの運営は明らかに政治的な意味を帯びていたと言えるのである。(8)

四　女房の役割

彰子入内に際して、道長が数多くの才媛を女房として配したことはよく知られている。これはまだ歳若い彰子

を一条天皇の籠愛深い定子中宮に対抗させるための道長の政治的意図であった。ところで、その中宮の女房たちの員数はどれほどであり、その中で紫式部はどういう地位にあったのであろうか。寛弘五年（一〇〇八）ごろに中宮彰子に仕えていた女房の数については増田繁夫がまず、次の記事に注目している。(9)

北の御障子と御帳とのはさま、いと狭きほどに、四十余人ぞ、後に数ふればゐたりける。

御産の場にいた「四十人」は、彰子の女房の他に、おそらく母源倫子の女房や内裏の女房、さらに妹の妍子や威子の乳母たちなどもいたと思われ、彰子の女房の実数ではないだろう。中宮定子に対して差をつける必要もあったから、特に「四十人」という多数の女房を集めたのだとは想像できないのである。やはり『紫式部日記』は『栄花物語』と『御堂関白記』と同様に道長関係の記事であるため、意識的な賛美や誇張と認められる部分が多く、この彰子の女房の人数も明らかにその一つと考えられる。彰子の場合には妹の妍子や威子の場合と同じように二十人ぐらいの女房がいたと考えてよいだろう。女房の人数はそれほど多くなくても、彰子に仕えていた女房たちはみな身分の高い出自の娘だったにちがいない。『栄花物語』には、彰子入内について、次のように記されている。

女房四十人、童六人、下仕六人なり、いみじうえり整へさせ給へるに、かたち心をばさらにもいはず、四位・五位の女といへど、ことに交じらひわろく、成り出で清げならぬをば、あへて仕うまつらせ給ふべきにもあらず、物清らかに、成り出でよきを、とえらせ給へり。

やはり『栄花物語』にも彰子の女房は「四十人」だと記されているが、ここで注目するべきことはその女房の身分であろう。四位・五位の受領層の娘といっても、女房として仕えさせなかったと言っている。「成出」というのはその人の生い立ちに関わる、立居振る舞いのことであり、いわば出自について述べていることになる。『紫式部日記』の様々な場面で詳細に描かれている女房の服装もその実家の栄誉の一つの証しと考えられて、女房の背負う家同士の競い合いでもあったことも指摘されている。(10)

人の局々には、大きやかなる袋、包ども持てちがひ、唐衣の縫物、裳、ひき結び、螺鈿縫物、けしからぬまでして、ひき隠し、「扇を持て来ぬかな」など、言ひかはしつつ、化粧じつくろふ。

これは、敦成親王出産の後に、お湯殿などの儀式が始まる前に女房たちが実家から装束を送らせ、熱心に準備している場面である。儀式にふさわしい装束を身纏うことが女房の重要な役割だったのであり、実家から運ばれてくる装束の袋、包みの描写は、女房の背後にある実家の後見を語っている。女房は家を背負って公の場に出ているのであり、装束の競い合いは背後の家の競い合いでもあることを作者は語っているのである。

身分の高い、姫君のような女房が増えるに従い、一般の受領層の娘の女房と差異化する必要が生じ、彰子後宮が女房の間の禁色への意識を高めさせていたことが推察される。『日記』の中で作者紫式部が女房集団を禁色を基準にして分類し、その服飾を詳細に記しているのを見ても、女房の序列に配慮しなければならない上下関係に厳しい彰子後宮の社会の独特な雰囲気が想像できるだろう。たとえば、「文読む」場面の後の次の装束の記述に注目される。

いとどものはしたなくて、輝かしき心地すれば、昼はをさをささし出でず、のどやかにて、東の対の局より参う上る人びとを見れば、色聴されたるは、織物の唐衣、同じ袿どもなれば、なかなか麗しくて、心々も見えず、聴されぬ人も、少し大人びたるは、かたはらいたかるべきことはとて、ただえならぬ三重五重の袿に、表着は織物、無紋の唐衣すくよかにして襲には綾、薄物をしたる人もあり。

彰子に仕えていた女房たちは身分だけではなく、年齢によってもベテランである「おとなしい人々」といまだに経験の浅い「若き人々」とに明確に分類されている。

うちとけたる折こそ、まほならぬ容貌もうちまじりて見え分かれけれ、心を尽くして繕ひ化粧じ、劣らじとしたてたる、女絵のをかしきにいとよう似て、年のほどの大人び、いと若きけぢめ、髪の少し衰へたるけしき、まだ盛りのこちたきがわきまへばかり見わたさる。

『日記』の敦成親王誕生の場面では、ベテランの女房と若い女房の役割の違いが明確に描かれている。ベテランの女房は親王誕生の後に中宮彰子のお世話をするのに最もふさわしい女房とされている。

昨日しほれ暮らし、今朝のほど、秋霧におぼほれつる女房など、みな立ちあかれつつ休む。御前には、うちねびたる人びとの、かかる折節つきづきしきさぶらふ。

一方、人々が集まって儀式が行われる際に、たとえば、ご誕生の五日目の夜は、若くて綺麗な女房たちが注目される大事な役割を果たしているのである。

髪あげたる女房は、原式部、小左衛門、小兵衛、大輔、大馬、小馬、小兵部、小木工、かたちなどをかしき若人の限りにて、さし向かひつつゐわたりたりしは、いと見るかひこそはべりしか。

摂関期の宮仕えは一つの仕事だけではなく、いろいろな種類の務めをしなければならない。特に中宮のもとで働く女性の場合は、まず仕えている主人の世話を全面的に担う。洗髪、話し相手、教育係。そして主人の衣食住に関しての諸々の世話をする。その中で重要なのはお客が来た時の取り次ぎ役である。当時はお客と主人が直接話すことはできなかったので、その間に入って言葉を伝達するのである。格好良く橋渡しをするのも女房の役目である。そうすれば主人が素晴らしい知識や人間性の持ち主であることが人々の間に知られるわけである。特に主人が中宮のような天皇の后であれば、中宮の知識や教養が立派であり、天皇にふさわしい女性である、といった噂が広まるのである。人々が集まる儀式の場では、とくに若い女房たちは衣装や髪型、お化粧などに気をつかう必要がある。場に不相応な身なりでもしようものなら、格好の噂の的にされてしまう。逆に、洗練された姿であれば、皆から注目され絶賛される。だから儀式の身繕いには細心の注意を払ったのである。[11]

御幸は辰の刻と、まだ暁より人びとけさうじ心づかひす。

午前八時ごろからはじまる一条天皇の御幸に、女房たちは、夜明け前からお化粧やおしゃれに熱中している。この大事な身繕いの目的は天皇に対して敬意を表すことだけではい。儀式の場で女房たちが素晴らしい衣装を纏っていることは、誰の目にも道長の栄華と権力の証しと映ったことだろう。

『日記』の敦成親王お誕生の場面では、女房たちのそれぞれの様子と儀式で果たす役割が記述され、一方消息部分では、日常的な時間の経過にしたがって女房たちの容貌と性格を観察し評している。女房の容貌は一定のパターンで詳細に描かれている。まず身体的な特徴、そして顔つき、それからかならず髪の様子が描写される。たとえば、宣旨の君という女房の場合には、次の記述が注目される。

宣旨の君は、ささやけ人の、いと細やかにそびえて、髪の筋こまかにきよらにて、生ひさがりのするより一尺ばかり余りたまへり。いと心恥づかしげに、きはもなくあてなるさましたまへり。ものよりさし歩みて出でおはしたるも、わづらはしう心づかひせらるる心地す。

女房の性格がそれぞれに違うのは当然であるが、女性の競争が激しい「場」である中宮サロンでは自分に関する悪口などに耐えられない、性格が弱くてすぐ泣いてしまう女房はサロンに生き残れない女性として明らかに非難されているのである。

小少将の君は、そこはかとなくあてになまめかしう、二月ばかりのしだり柳のさましたり。様態いとうつくしげにもてなし心にくく、心ばへなどもわが心とは思ひとるかたもなきやうにものづつみをし、いと世を恥ぢらひ、あまり見苦しきさまで児めいたまへり。腹汚き人、悪しざまにもてなしいひつくる人あらば、やがてそれに思ひ入りて、身をも失ひつべく、あえかにわりなき所ついたまへるぞ、あまり後ろめたげなる。

ところで、どうして紫式部は女房たちの容貌などを詳細に書き記すのだろうか。おそらくは道長から、女房たちの特徴や人柄、長所・短所などを書くように頼まれた可能性があるのではないか。道長にとって大事なことは、今後、中宮彰子をどのように盛り立ててゆくか、そのために、どのような女房を集め、どのように仕えさせてゆくかであっただろう。[12]

以上、摂関期のサロン活動の記録である『紫式部日記』を読んでみると、女房の存在は不可欠なものとなっていることが理解できる。女主人である彰子の身の回りの世話や官人たちとの取り次ぎなどの実務的な職にあたるのが女房であるが、摂関期においては、魅力的なサロンをつくることが天皇の加護を争うための重要な要素となり、すぐれた女房を集めることが、重視されるようになった。諸井彩子が指摘するように摂関期には女房を集めるのは父親であったから、后妃のサロンにおいて父親やそれに準ずる人物の影響は非常に大きかった。藤原道長は、紫式部、伊勢大輔、泉式部といった、物語作家や歌人として名高い女房を集めてサロンを活性化させると同時に、出自の高い女性を出仕させて、自分の娘の格を高める政治的な方策をとったに違いないと思われる。[13]

五　紫式部の地位と役割

紫式部が中宮彰子に出仕し、女房身分となったのは、夫藤原信孝と死別した長保三年（一〇〇一）以後のこと

であった。初出年時は定かでなく、古来諸説のあるところであるが、確説をみていない。道長は紫式部の父親である為時に、紫式部を中宮彰子のもとに出仕させるように求めたと思われる。それ以前に中宮定子のもとでは、清少納言を中心にして、明るく、華やいだサロンの雰囲気が横溢していた。定子が亡くなってから一条帝の後宮では、中宮彰子の時代が到来した。おそらく道長は、中宮彰子のもとでも定子のもとでみられたようなサロンを形成させたかったのであろう。その中心になりうる人物としては、すでに人々の間で評判になっていた『源氏物語』の作者の紫式部をぜひとも中宮彰子のもとに迎えたかったのである。他にもいろいろと道長家にゆかりもあったのだろうが、やはり何といっても『源氏物語』作者としての名声がきっかけになったと推定される。

ところで、紫式部の女房としての職分は何であったのか。はじめは命婦から出発し、やがて掌持に登進したと推定されているが、明証は得られていない。紫式部の身分を考察するとき、よく引用されているのは『日記』にみられる、中宮内裏還啓の折の女房たちの乗車順である。

御輿には宮の宣旨乗る。糸毛の御車に殿の上、少輔の乳母若宮抱きたてまつりて乗る。大納言、宰相の君、黄金造りに、次の車に小少将、宮の内侍、次に馬の中将と乗りたるを、わろき人と乗りたりと思ひたりしこそ、あなことごとしと、いとどかかるありさまむつかしう思ひはべりしか。殿司の侍従の君、弁の内侍、次に左衛門の内侍、殿の宜旨式部とまでは次第知りて、次々は例の心々にぞ乗りける。

女房たちは乗車順序が定められていた。ここに、おのずと女房たちの序列めいたものが窺われる。紫式部は、大納言の君が乗った黄金造りの車から数えて三両目の車に、馬の中将と同乗するのであるが、ここに名を挙げら

れている女房らは、いずれも上﨟女房、あるいは古参の女房、内裏女房ばかりである。紫式部は掌持であった可能性は少ないが、中宮の高級女房で五位の命婦ぐらいであったかと推定されており、さらに、中宮方の女房の実質的な監督者・指揮者の立場にあったのではないかと指摘されている。[14]『紫式部日記』のなかの女房には、彼女自身も含まれることは当然である。が、概して客観的な描写を主とし、情況的な事実が中心となっているため、女房の中に自分自身を含めることはきわめて少ない。たとえば、御産養第五夜の儀の場面では次のように記されている。

御膳まゐるとて、女房八人、一つ色にさうぞきて、髪上げ、白き元結して、白き御盤もてつづきまゐる。今宵の御まかなひは宮の内侍、いとものものしく、あざやかなるやうだいに、元結ばえしたる髪の下がりば、つねよりもあらまほしきさまして、扇にはづれたるかたはらめなど、いときよげにはべりしかな。

『日記』のいわゆる消息部分の中にも紫式部が経験の長い、古参の女房の役割を果たしていることが窺える記述がある。若い女房たちを外から客観的に観察し、厳しい貴族社会で成功するための様々な助言を与えているのである。

様よう、全て人はおいらかに、少し心掟のどかに、おちゐぬるを基としてこそ、故も由もをかしく心安けれ。もしは色めかしくあだあだしけれど、本性の人柄癖なく、傍らのため見えにくきさませずだになりぬれば、憎うははべるまじ。われはと、奇しくならひもち、気色ことごとしくなりぬる人は、立ち居につけてわれ用

意せらるるほども、その人には目留まる。目をし留めつれば、必ずものを言ふ言葉の中にも、来てゐる振る舞ひ立ちて行く後ろでにも、必ず癖は見つけらるるわざにはべり。

紫式部も日常の宮仕えにおいて、また儀式などの折にも、他の女房たちと同様に侍女として何らかの役割を分担し、奉仕活動に努めていたはずであるが、経験の浅い女房たちとは異なり監督者・指揮者の立場にあったと想像できる。さらに、優れた物語の作者として知られていた紫式部は中宮の家庭教師役、あるいは学問のお相手役も果たしていたと考えられる。

宮の御前にて『文集』の所々読ませたまひなどして、さるさまの事知ろしめさまほしげに思いたりしかば、いと忍びて人の候はぬものの隙々に、一昨年の夏頃より、「楽府」といふ書二巻をぞしどけなながら教へたてきこえさせてはべる、隠しはべり。宮も忍びさせたまひしかど、殿も内裏も気色をしらせたまひて、御書どもをめでたう書かせたまひてぞ殿はたてまつらせたまふ。

この場面には注目すべき点は二点ある。まず、紫式部が他の人に隠れて中宮彰子に漢詩文を教えなければならないことである。それから、藤原道長が中宮彰子の教育を気にかけ、わざわざ漢籍などを立派に書家に書かせて中宮に与えていることも挙げられる。平安時代には中国語および中国文化を学ぶ貴族の女性は非常に限られていたので、天皇にもその知識を持つ女性は珍しく、魅力的な存在だと思われたにちがいない。中国語・中国文化を学ぶことを、将来に国母になる中宮は大事な「胎教」と意識していた。そのため、紫式部は女性の競争が激しい

貴族社会にあって中宮に漢詩文を教えていることを知られたくないと考えたのであろう。道長は幼くして入内した彰子を文化的な面でも熱心に支援しており、紫式部もその意向に従うことが求められていたと思われるのである。

おわりに

以上、『紫式部日記』における藤原道長の政治的意図とそれに関わる女房たちの役割を考察してきた。ここまで見てきたように『日記』を論ずる上で、道長と娘彰子の描かれ方に言及しないことは考えられないことである。この二人が登場する場面は印象的なものであり、作者紫式部にとっても道長と彰子の存在の重みが感じられるのである。サロンの文化的営みを主導する彰子、そしてサロンを背後で支える道長は『紫式部日記』に生き生きと描かれており、平安時代に中宮サロンがどのような役割を果たしていたかが把握できる。

中宮サロンが魅力的であれば、それは帝の寵愛とも結びつく。だからこそ、摂関期において後宮サロンは文化的営みの場として大きな役割を果たしたのである。中宮の後見人たる父親が優れた女房たちからなる活発なサロンをつくることに力を注いだのも、それが一家の栄華のためにきわめて重要なことだったからである。

注

（1）宮崎荘平『王朝女流日記案内』（朝文社、一九九二年）。
（2）中野幸一『正訳　紫式部日記　本文対照』（勉誠出版、二〇一八年）。
（3）『紫式部日記』の引用は中野幸一『正訳　紫式部日記　本文対照』に拠った。

（4）福家俊幸『紫式部日記の表現世界と方法』（武蔵野書院、二〇〇六年）。
（5）原田敦子「道長と紫式部――『紫式部日記』の一視点」（秋山虔・福家俊幸『紫式部日記の新研究――表現の世界を考える』新典社、二〇〇八年）。
（6）福家俊幸注（4）前掲書。
（7）諸井彩子『摂関期女房と文学』（青簡舎、二〇一八年）。
（8）諸井彩子注（7）前掲書。
（9）増田繁夫「紫式部と中宮彰子の女房たち――中宮女房の職制」（南波浩編『紫式部の方法――源氏物語・紫式部集・紫式部日記』笠間書院、二〇〇二年）。
（10）福家俊幸注（4）前掲書。
（11）川村裕子『古典の中の女性たち――王朝生活の基礎知識』（角川選書372、角川学芸出版、二〇〇五年）。
（12）田中宗孝・田中睦子『紫式部日記解読』（幻冬舎、二〇一五年）。
（13）諸井彩子注（7）前掲書。
（14）増田繁夫「女房としての紫式部――『紫式部日記』から」（増田繁夫・鈴木日出男・伊井春樹編『源氏物語研究集成――源氏物語と紫式部』風間書房、二〇〇一年）。